

第3回上野地区まちづくりビジョン策定委員会における主な意見

1. 学識委員

- ・「上野の将来像」は以前よりかなりまち側のイメージに近づいてはいるが、「文化・芸術の殿堂」が、まだ少しかたい感じがする。何かまちの新しいあり方みたいなものをうまく表現し、キャッチコピーとして世界や日本の他の地域の人々に向けてわかりやすく伝えるべき。
- ・これまでは消費が移動を生んできたが、これからは、美術館・博物館等での経験、いわゆるコト消費と、それを目的に訪問した結果みつかる集積の2つがないと、都市を訪れる意味がないという時代に移行している。
- ・外から見た上野はどう見られているのかという点も意識すべき。
- ・今後の推計において、駅から出てくる人がどのように動くのかを掴んでおく必要がある。
- ・「取組みの方向性」は、ビジョンを実現するための具体の施策につながっていくが、これがビジョン全体の方向性と合っているのか、今後、「まちづくり部会」「基盤整備部会」「上野文化の杜」においてよく議論してもらいたい。
- ・今後、各部会では、何を大切にし何を変えていくのかという議論をより丁寧に実施し、皆さんが合意できるルールを設定するのが今後の運用に当たり重要となる。

2. 区民委員

- ・「上野の将来像」について、「粋（すい）」と「粋（いき）」という言葉の意味が広く曖昧過ぎるため、もう少し定義をはっきりしてほしい。
- ・将来像にはふれることのない力強いテーマが必要で、そこから様々な取組みやアイデアが湧き出してくるはず。
- ・何も目的がなくて来訪してくる人が増えているという結果もあるが、一方で欧米の観光客は事前に目的地を詳細に調査した上で、強い目的を持って来ている。
- ・上野の存在を明確にするために、持っている資源を活用し、山の魅力、まちの魅力、そして駅を中心とした三位一体の回遊性の強化により魅力を創出する必要がある。
- ・上野の周辺地区では外国人が非常に増えているが、非常にマナーが悪く、まちの将来が不安である。また近年ワンルームマンションが増えており、居住者の顔が見えにくい。

3. 鉄道事業者

- このまちでどのような回遊性のニーズがあるのか、もう少し丁寧に分析していく必要がある。

4. 関係機関（国）オブザーバー

- 今あるものを全て壊してしまうとまちへの愛着が失われてしまうので、今あるものを前提として将来像を描くべき。